スポーツ的社会化論からみたバーンアウト競技者の変容過程

吉田 毅¹⁾

抄 録

競技者におけるバーンアウトに関する研究が、1980年代後半から行われている。しかしながら、まだバーンアウトに陥った競技者のその後については明らかにされていない。そこで本研究は、5名のバーンアウト競技者の変容過程を調査し、その結果をスポーツ的社会化論の新たな視点、すなわち青年期以降のスポーツによる社会化の視点、またソーシャライズの主体的側面を捉える視点から考察した。彼らの変容過程に関する調査には、非指示的（自由）面接が用いられた。

本研究で得られた主な知見は、以下の通りである。

- 1) バーンアウト競技者は、それぞれなりに情緒的な支えを得たことにより、積極的な主体性を発揮して問題的状况を解決し、バーンアウトを克服するに至った。彼らは、こうした過程を通して、自らの主体性ないしはアイデンティティを再形成したと言えよう。すなわち、彼らは、スポーツによる再社会化を遂げたと考えられる。
- 2) バーンアウトの克服ないしは予防のためには、当該競技者が情緒的な支えを得ることが重要である。しかし、それが身近で得られない場合は、自ら積極的な主体性を発揮（形成）することが必要となる。こうした主体性を発揮するためには、内省活動を活発化し、自我の社会性を空間的・時間的により拡大することが有効な手がかりになると言えよう。
- 3) スポーツ的社会化論における課題は、少年期のみならず、バーンアウトを始めとして青年期以降にも色々と存在するであろう。それを解明するためには、スポーツによる社会化研究の対象を、青年期や成人期へと拡大することが不可欠である。それにより、スポーツにおける再社会化の様々な様相を分析していくことが重要と思われる。

キーワード：競技者のバーンアウト、変容過程、主体性、スポーツによる再社会化、青年期以降の社会化

Transformation Process of Burnout Athletes from the Viewpoints of the Theory on Sport Socialization

Takeshi Yoshida ¹⁾

Abstract

Studies on athlete's burnout (burnout syndrome) have been conducted since the latter half of 1980s. However we have not understood as yet what have become of burnout athletes (athletes identified as cases of burnout in preceding studies) since.

The purposes of this study are to clarify the transformation process of athlete's burnout through non-directive(free) interviews to 5 burnout athletes and to consider these findings from the new viewpoints of the theory on sport socialization which are one of socialization via sport on and after adolescence and one of paying attention to socializee's active side.

The main findings obtained are summarized as follows:

1) Five burnout athletes each displayed positive subjecthood (autonomy) because they got each emotional support, and overcame the burnout. It seems they built up the subjecthood and identity through such process. That is, they accomplished resocialization via sport.

2) Athletes need to get some emotional support to overcome or to prevent burnout. But in case that they can't get it within close range, they need to display (or build up) the subjecthood by themselves. The effective keys for them to do so are to reflect on themselves actively and to expand the sociality of their each self in point of space or time.

3) In the theory on sport socialization, various problems besides burnout exist not only in boyhood but on and after adolescence. Accordingly the object of the study on socialization via sport must be expanded to adolescence and adulthood, and it is important to analyze various aspects on resocialization in sport contexts.

Key words : athlete's burnout, transformation process, subjecthood, resocialization via sport, socialization on and after adolescence

1) Kyushu University, 6-1 Kasuga-koen, Kasuga, Fukuoka 816

1. はじめに

バーンアウト・シンドローム (burnout syndrome ; 以下バーンアウトと略す) とは、米国の精神分析医Freudenberg [Freudenberg, 1974] によって初めて報告された一種の職場不適応を表す概念である。この報告以来、看護婦、教師、ソーシャル・ワーカー、それにスポーツに関しては、アスレティック・トレーナー、コーチ等の対人専門職を対象とした研究が行われてきた⁽¹⁾。競技者のバーンアウトが問題視されるようになったのは、概ね1980年代後半からであり、これに関する研究はまだ緒についたばかりと言える。

この用語は、研究者によって様々な定義されているが [Farber, 1983]、端的に言えば「仕事本位で、仕事以外に私生活の満足、楽しみをもつことができないパーソナリティーの持ち主が仕事上挫折して、それまでの精力的な仕事ぶりから、急速に無気力状態やうつ状態に陥る」 [小此木, 1985b : 188] 場合を言う。より具体的には、まず燃え尽きするというからには、それなりのプロセスが認められる。これについては、中込・岸 [中込・岸, 1991 : 314] も指摘するように、Edelwich and Brodsky [Edelwich and Brodsky, 1980] による“Enthusiasm → Stagnation → Frustration → Apathy”の図式が有効と思われる。そして症状としては、MaslachとJackson [Maslach and Jackson, 1981] が指摘する、情緒的消耗、個人的成就感の欠如、離人化といった3つにまとめられよう⁽²⁾。ただしバーンアウトは、段階的に進行していくプロセスであるから、こうした心理的状态しか認められない者は軽度のバーンアウトであり、それが進行していくと心身症的な身体的症状にまで及ぶと考えられる [稲岡, 1988]。基本的には、こうしたパーソナリティー要因とプロセス及び症状に基づいて、バーンアウトは把握されるのである。

さて、バーンアウトが、このように心理学的意味合いの色濃い用語であること、また、本来対人専門職において命名されたことを踏まえる

と、これを競技者に適用する際には、Smith [Smith, 1986] あるいは岸・中込 [岸・中込, 1989] のように、心理学的観点からより概念的に掘り下げることが重要と思われる。それにより競技者のバーンアウトが、それと類似の症状を呈する心理学的概念から区別され、1つの独立した研究対象として据えられることになる。また、岸ほか [岸ほか, 1988] は特にその症状 (状態) について検討し、中込・岸 [中込・岸, 1991] はその発症機序を分析している。それに、土屋 [土屋, 1989] はその程度を規定する要因を統計的に分析しているが、これらも心理学的観点からの研究である。こうした研究により、競技者におけるバーンアウトの概念について、ある程度明確化されたと言える⁽³⁾。

しかしながら、そもそもこれは、「その発生の社会心理的なメカニズムについて名づけられた言葉」 [小此木, 1985a : 97] であり、また対人専門職を対象とした研究でもそうした側面に留意しているように [稲岡, 1988]、競技者のバーンアウトを解明するには、個人の競技歴をめぐる心理的側面のみならず社会的側面にも着目することが重要である。従って、これを社会学的観点から分析することも必要となる。そこで吉田 [吉田, 1989] は、特に競技者と指導者との相互作用と競技者の役割に着目して、競技者のバーンアウトの発症機序を分析している。また、松尾ほか [松尾ほか, 1990] は、その状態を規定する社会心理的要因を統計的に解明しようとしている。

いずれにせよ、現段階ではこの現象に関連する分野間で研究の深化を図ることが肝心と思われるが、これらの研究が、これまでに競技者のバーンアウトを解明するために一定の成果を上げてきたことは言うまでもない。しかし、バーンアウトに陥った競技者 (以下バーンアウト競技者と略す) がその後どのようなのかは、まだ明らかにされていない。岸ほか [岸ほか, 1991] は、競技者のバーンアウト状態の変容を分析してはいるが、この研究は特にバーンアウ

ト競技者に焦点を当てたものではない。

ただし、中込・岸〔中込・岸, 1991: 318-319〕が取り上げたマラソン選手については、付随的ではあるが唯一バーンアウトからその後が示されている。この選手は、結局自殺といった究極的結末に至っており、このことは競技者におけるバーンアウトの危険性を尚更に物語っている。また、対人専門職を対象とした先行研究から、できるだけ軽度の段階でその進行を阻止する必要性が示唆されている〔近澤, 1988〕。従って、バーンアウト競技者の変容過程を分析し、その関連要因を見出すことは重要と言える。そしてこうした要因は、取りも直さずバーンアウトの発生にも関わると考えられるのである。

ところで、この現象が、競技者の一連の競技への参与過程で生起することは明白である。従って、これを社会的に研究する場合、スポーツ的社会化 (sport socialization) の文脈に位置づけることが有効と思われるが〔吉田・松尾, 1992〕、無論このことはバーンアウト競技者の変容過程を捉える場合も同様である。ただしこの場合は、問題の性質上、スポーツによる社会化 (socialization via sport) 、しかも青年期以降のそうした社会化の視点から注目される。従来のスポーツ的社会化論においては、ややもすればスポーツへの社会化 (socialization into sport)、また少年期の社会化に焦点が当てられ〔山口・池田, 1987〕、こうした側面はあまり着目されてこなかった。また、周知のように、今日のスポーツ的社会化論においては、その初期における社会化過剰的人間観の色濃い思考法の反省から、ソーシャライジ (社会化される個人) の主体的側面を捉える視点が重視されている。そこで本研究では、こうしたスポーツ的社会化論の新たな視点からバーンアウト競技者の変容過程を捉えてみたい。それによって、競技者のバーンアウトがより解明されると同時に、スポーツ的社会化論に新たな知見が得られるように思われる。なお、本研究で対象とするのは、先行研究〔吉田, 1989〕

で取り上げられた、A大学サッカー部に所属する5名のバーンアウト競技者である。

その際に、初期のスポーツ的社会化論において主流であった社会的役割-社会システム論的アプローチ〔Kenyon and McPherson, 1973: 訳書 332-341〕は有効でない。なぜならば、これは、ソーシャライジがいかなる社会的条件の下でスポーツに参加するようになるのかを分析するための理論的枠組みであり、その主体的側面の分析に耐え得るものではないからである。そこで本研究では、スポーツにおける主体的社会化を分析する際に有効と考えられる、吉田〔吉田, 1992〕が提示した理論的枠組みを1つの手がかりにしたい。また、論の展開としては、まず上記したバーンアウト競技者の変容以前の様態を把握し、次に彼らの変容過程に関する調査結果について提示する。その上で、彼らの変容過程について、上記のようなスポーツ的社会化論の新たな視点から考察していくことにしよう。

2. バーンアウト競技者の変容以前の様態

前述したバーンアウト競技者の変容過程を捉えるには、その前提として変容以前の様態、すなわち、彼らがいかなる特性を有する競技者なのかを把握しておくが必要である。それについては先行研究〔吉田, 1989; 吉田・松尾, 1992〕で提示されているので、ここではそれらに基づいてその概要を把握していこう。その際に、前述した競技者のバーンアウトに至るプロセス、すなわち〈競技への熱中→競技成績の停滞・低下→競技への固執→消耗〉という図式に沿っていくと理解し易いと思われる。

なお、彼らは、対人専門職のバーンアウト度を測定する質問紙である Maslach Burnout Inventory を、競技者用に翻訳・修正した質問紙⁽⁴⁾に対する回答で高得点を示したこと、更に、その後の面接調査で、上記のようなプロセスが認められたことにより、単なる一過性の意欲の低下ではなくバーンアウトと断定されたのである〔吉田, 1989〕。

彼らは、早期から競技（サッカー）を集中的に行ってきたおり、その頃から比較的優れた競技成績（地元の選抜チームに選ばれる等）を納めていた。こうした成功経験と、それに伴う周囲の人々の期待や支援、ないしは指導者の継続的な厳しい働きかけが、負けず嫌い等といった彼らの性格特性に拍車をかけ、その後は以前にも増して競技に熱中するようになった。彼らはこうした過程で、各々のアイデンティティ（自我同一性）形成の手がかりを、特に競技の世界に求めるようになっていったのである。つまり、彼らには“sport only identification” [Ogilvie and Howe, 1986] という用語が大いに当てはまる。そして、引き続き比較的優れた競技成績を納めていった。それゆえ彼らは、日頃所属するサッカー部においては、自他ともに認めるヒーローであり続けたのである。

ここで注意すべきは、こうした過程で、彼らに指導者に対する依存的（受身的）態度が強く形成されていったことである。これは、岸・中込 [岸・中込, 1989 : 237] がバーンアウトに陥る者の病前性格として指摘する、他者志向や主張的行動の欠如に結びつく。彼らの指導者は、彼らに対して厳しい働きかけをしたが、負けず嫌いな彼らは、そうした指導者から認められることによって満足感を得ていた。そして、彼らは実際に指導者から認められ、その下で成功経験を重ねたことにより、彼らにとって指導者が絶対的存在となり、また情緒的な支えにもなっていったと考えられる。

ところでFischer [Fischer, 1983 : 42] は、バーンアウトに陥る者は自尊感情が高い状態にあると指摘するが、このことは正しく彼らに当てはまる。つまり彼らは、こうした過程で、自惚れとも言える高い自尊感情を有するヒーロー的競技者としてのアイデンティティを「真の自我」 [船津, 1983 : 206]、換言すれば自我の核心的な部分として形成してきたと考えられる。それゆえ彼らは、その後進学する際にも、全国的にトップクラスのサッカー部を有するA大学を志望した。そして、念願が適いその大学に入

学するに至り、その後は憧れのサッカー部への入部が実現したこともあり、以前通りに競技に専心した。

この辺までは、5名ともそれぞれなりの成功経験を有し、競技に熱中し続け、上記のようなアイデンティティを形成してきた点で同様であるが、ここから各々の競技レベルにより違いが生じてくる。しかしながら、遅かれ早かれ5名ともに停滞した状態に陥り、それが継続的に続くようになった。つまり彼らは、上記のようなアイデンティティを維持するには困難な「問題的状况」 [船津, 1983 : 96] に直面したのだが、そこで妥協せずにそうしたアイデンティティに固執して競技に励み続けた [中込・岸, 1991 : 321]。それでもこうした状況は変わらず、彼らは理想と現実のギャップを益々主観的に感じるようになった。そこで、彼らに形成されている指導者に対する依存的態度が災いし、彼らはその状況を自力で解決し得るような、言わば積極的な主体性⁽⁵⁾を発揮できずにバーンアウトへと進展していったのである。ただし、前述のように、バーンアウトが段階的に進行していくプロセスであるならば、彼らの場合は身体的症状にまでは至っておらず、比較的軽度のバーンアウトということになるであろう。

なお、彼らのように軽度のバーンアウトの場合は、問題的状况を解決するには至らない、言わば消極的な主体性しか発揮できにくくぶっている状態と理解される。表現を換えれば、彼らの現在の競技レベルに応じたスポーツ役割期待（sport role expectation ; 以下REと略す）から距離を置いた、スポーツ役割距離（sport role distance ; 以下RDと略す）状態と言えよう。また、重度の場合は、主体性を発揮するというよりも、むしろ衝動的にREを拒否している状態ということになろう [吉田・松尾, 1992 : 642]。こうした意味で、バーンアウトは、集団からの離脱とまではいかなくとも、社会（集団）的逸脱行為と捉えることができよう。

3. バーンアウト競技者の変容過程

－調査結果の提示－

それでは次に、5名のバーンアウト競技者に対する調査結果について提示していくが、調査の手順は次の通りである。

まず、バーンアウト競技者に対する調査の前に、彼らのバーンアウトと断定された約1年後の様子を、A大学サッカー部の部員ないしはコーチに会って尋ねた。そこで、彼らが同部で活発に活動していることが確認されたので、次に彼らに対する調査を行うことにした。なお本研究では、彼らの変容過程とその要因（契機）について、彼らの置かれた社会的文脈との関連で多面的・集中的に分析することが必要である。それには調査において、被調査者の幅広い回答の余地を考慮しなければならないし、またそうした回答には臨機応変な対処が求められる。そこで調査方法は、非指示的（自由）面接法を採用した〔直井, 1988〕。内容的には、彼らの変容過程をわかり易く連続的に捉えるために、バーンアウトに陥った頃からそれを克服するに至るまでを系時的に、更に彼らの今後について探っていった。面接は、1988年12月から1989年1月にかけて、各々について約90分間行い、回答は記述していった。彼らとは、調査以前に対話の機会を設けたこともあり、各々についてラポールは良好であったと判断される。

ところで、こうした事例研究は、「社会的人間的事象における因果関連の把握」〔波多野・中村, 1981: 179〕には有効だが、データ解釈が調査者の主観によって左右されるという欠点がある〔金子, 1993〕。また、被調査者の回答においては回想による誤謬が生じる可能性もある。こうした解釈的な問題は、本研究の方法論的限界と言わねばならない。そこで、これらの点を理解した上で、データ解釈においては被調査者の「地平」〔舩本, 1988: 107〕をできる限り理解するように努めた。更に、ややデータに曖昧さが残る2名（事例A・B）については、各々について約60分間の面接を1989年12月に再度行った。

では以下に、各々の事例の変容過程について提示するが、その際に、各々の事例についてより理解し易くなるように、調査のデータ以外に先行研究〔吉田, 1989〕で提示されている内容（例えば、事例Dがジュニア時代に輝かしい実績を有する点など）を若干補足したい。ただし、これは調査のデータを全く歪めるものではないことを断っておこう。

〈事例A〉第1回面接時：大学4年・同部の学生コーチ。第2回面接時：高校の教員・赴任校のサッカー部を指導。

彼は、部内で納得のいく評価を得ることができないためにバーンアウトに陥り、その後は逃避的にサッカー以外に自分を生かせる活動を模索するようになっていた。その頃の彼にとってみれば、自分の活動する状況がたとえサッカーでなくとも、彼の自尊感情を損なわなければよかったようである。ところが、結局そうした活動は見つからず、ほとんど惰性的に部活動を続ける毎日であった。そんな時に監督から呼び出され、コーチ的立場で下級生の技術指導をしてみないかという話を受けた。しかし彼は、やはり競技者として注目され、満足感を得たかったので、即座に決断することはできなかった。それゆえ、彼なりに時間をかけて考えたようである。そして、「将来のためにも、これからは自分なりにサッカーを勉強していこうと思うようになった」と語るように、彼はただ単に競技者としてではなく、卒業後教員になることを踏まえて、後輩を指導しながら共にサッカーを学んでいこうと決意した。そして、その後はコーチの研修に励み続けた。卒業後は、高校の教員として教鞭をとると同時に、赴任校のサッカー部を熱心に指導している。そこでは、大学4年時のコーチ研修が非常に役立っていると言う。

〈事例B〉第1回面接時：大学3年・位置的に以前と変わらず（3軍）。第2回面接時：大学4年・位置的に3年時と同様。

彼は「下のチームの部員の方が、上のチームの部員よりもむしろ真面目に部活に取り組んでいるのに、それがほとんど評価されなかった」、

「サッカーへの取り組み方だっていい加減な者が何で認められるのかわからなかった」と語るように、彼も部内の評価の在り方に対する不満によりバーンアウトに陥ったようである。それゆえ、その部に嫌気がさしていたが、3年になり彼が所属するチームのコーチが変わった。そのコーチは、サッカーを生活文化の1要素と捉えていたようで、彼らにサッカーに献身することを求めるのではなく、レジャー的に取り組んでもよいのではないかと話した。彼は、そうした考えにそこで初めて出会ったそうで、すぐそれに共感を覚えたと言う。それまではサッカーに献身するのが当たりまえで、それで身を立てなければと思っていたが、そこで自分の視野の狭さに気づいた。それで彼は、競技者として目立たなくとも、自分なりにサッカーを楽しめればよいと思うようになり、そのせいか大らかに部活動に取り組めるようになった。彼は「これからは、スポーツについて色々と勉強していきたい」とも語っている。

〈事例C〉面接時：大学3年・位置的に以前と変わらず（3軍）。

彼は、バーンアウトに陥った頃、「高校までは自分が部に必要とされていたが、今は全く必要とされていないと思った」そうで、すっかり自己のアイデンティティを混乱させていたようである。それで、サッカー以外でも「他に自分にメリットのあるものがあればそちらに移りたいと考えていた」が、そうした活動は見つからずにいた。しかし、オフの時期を境目にして、「何のために自分はこの大学に入ったのか」と考えるようになった。そして彼は、過去を振り返り、高校の頃にサッカーの恩師に感銘を受けたことを思い出した。その頃は、将来はその恩師のようになりたいと思っていたそうである。それが、競技者として活躍するにつれて、次第に競技者として注目を浴びることばかりに固執するようになってしまったと言う。そこで彼は、そうした自分を省み、改めて教員になろうと思うようになった。彼は、「フォロアーとして部活動を行うことは、むしろ将来先生になった時

に役に立つ」、「単にフォロアーではなく、自分なりの役割を見つけて有意義に活動しなければと思う」と語るように、彼の意識の変容は著しい。その後は、自ら事務的な目立たない役割を引き受けて、部活動に積極的に取り組んでいるようである。

〈事例D〉面接時：大学4年・位置的に以前と変わらず（2軍）。

ジュニア時代に輝かしい実績を有する彼は、大学に入ってからすぐに頭角を表すことはできなかったが、徐々に重要な試合にも出場するようになっていった。しかし、「高校の頃までより体が思うように動かなくなっていた」と語るように、怪我の影響もあり、彼にとってみればなかなか納得のいくプレーができなかったようである。それゆえ、2軍と3軍の間を行ったり来たりという状態が続いていた。彼はそうした中で、自分が認められず、彼にとって納得のいかない者が認められるといったコーチの評価に対して不満を感じるが多くなり、そうした状況でバーンアウトへと進展していった。くすぶった状態で部活動が続ける日が続くうちに4年になった。そして彼は、オフを利用して帰省した際に、恩師に会いに行った。そこで、地元の有力者であるその恩師から、卒業後は地元に戻って、教員としてサッカーの指導に活躍してほしいと激励された。彼は、4年になってから就職のことを考えてはいたが、そこで気持ちに踏切りが付き、教員として地元に戻り、後進の育成にあたらうと決意するに至った。それゆえ、その後は競技者としての自分への評価云々よりも、卒業後のためにサッカーに関してできるだけのことを部活動の中で吸収しようと考え、真剣に部活動に取り組むようになった。

〈事例E〉面接時：大学4年・同部の中心選手。

彼も過去に輝かしい実績を有し、大学入学後もしばらくは第一線で活躍していたが、2年になってから次第に低迷してきた。彼はそうした状態を経験したことがなかったと言う。監督から新たなポジションを与えられたが、それまでのポジションへの強いこだわりから、それに対

する心理的抵抗感が強かった。そのせいもあってか、そのポジションをなかなか上手くこなせなかった。次第に練習も情性的になり、何で自分はサッカーばかりやってきたのだろうと思うようになった。彼は、それで退部まで考えたが、他にやることも見つからず、毎日のように酒に依存していた。それからしばらく経って、あるコーチから家に招かれ話を交わす機会を得た。このコーチは、現役時代に輝かしい実績を残しており、しかも人格的にも魅力があるということで、彼が尊敬する人物であった。そこで、彼が不満を持っていた新たなポジションに関するビデオを見せられながら、コーチと酒を飲んだ。彼はコーチと色々話すうちに、そのポジションの重要性や魅力を感じるようになった。またコーチに、たとえこれから上手いいかなくても、とにかくできるところまで頑張ってみることが自分のためではと激励された。彼は、そのコーチに自分のことを気遣ってもらったことに感謝し、注目されなければ気がすまなかった自分を省みた。それで、とにかくベストを尽くすことが重要と考えるようになり、バーンアウトに陥る以前よりも精力的に練習に励み、同部の中心選手へと育っていったのである。彼は「あのコーチが、そんなにまでして自分のことを考えてくれているとは思わなかった。その人がいなかったらサッカーはやめていたし、自分がどうなっていたかわからない」と語る。

以上みてきたように、5名の具体的な変容過程は様々であるが、それぞれなりにバーンアウトを克服し、その後は積極的に部活動に取り組むようになった。その姿は活力に満ち、ほとんど迷いなどなく、1年前と比較すると謙虚さ、力強さが感じられる。では次に、こうした彼らの変容過程を、前述のようなスポーツ的社会化論の新たな視点から考察してみたい。

4. スポーツ的社会化論からみたバーンアウト競技者の変容過程

今日のスポーツ的社会化論においては、ソーシャライジの主体的側面、とりわけ主体性の

形成過程に着目することが主要な課題の1つと言えよう⁽⁶⁾。吉田〔吉田, 1992〕は、それを分析するための理論的枠組みを提示しているが、前述したバーンアウト競技者の変容過程を考察する上で、そこにおける概念図式(図1参照)が有効な手がかりになると思われる。そこで次に、そうした過程を主に図1に基づいて考察してみよう。

図1. スポーツにおける主体的行為の概念図式
(中央の最大枠内が主体的行為) (吉田, 1992)
注) 社会的規範は外生変数である。

まず彼らは、過去の競技歴の中で、前述のようなヒーロー的競技者としてのアイデンティティを真の自我のごとく形成してきたので、それ相応のスポーツ役割観念 (sport role conception ; 以下RCと略す) を有していると考えられる。しかし、彼らの現在の立場は、中心的立場で競技を行ってきた過去の立場と変わったため、彼らの現在の競技レベルに応じたRE (スポーツ役割期待) とそうしたRCとの間にギャップが生じ、前述のように彼らは問題的状况に直面した。そこで、そうしたRCに固執したために、他者の役割期待と本来の自分との間に対立や矛盾が存在する状態を意味する「パーソンロール・コンフリクト」〔船津, 1983 : 205-206〕が彼らに惹起された。更に彼らは、こうした状況を経験したことがなく、

また、彼らに形成されている指導者に対する依存的態度（不十分な主体性）が災いして、こうした状況を解決し得るような、言わば積極的な主体性を自力で発揮することができずにバーンアウトに陥ったと考えられる。

ところで、バーガーとluckマンによれば「主観的現実には常にある特定の妥当性構造、つまりそれを維持するのに必要とされる特定の社会的基礎と社会的過程とを拠り所としている」[Berger and Luckmann, 1966 : 訳書 260]。表現を換えれば、あるアイデンティティはそれを確認してくれる環境の中でのみ維持し得るのである。バーンアウト競技者は、端的に言えば、停滞期が続いたために新たな現実と直面し、過去に形成されてきた「古いアイデンティティ」[Berger, 1963]を維持するのに必要とされる妥当性構造（環境）を失ったのである。しかし彼らは、そこで新たな現実に適うように、自力でアイデンティティを変容させることができずにバーンアウトに陥った。バーガーとluckマン[Berger and Luckmann, 1966 : 訳書 277]によれば、これは新たな客観的現実と古いアイデンティティとの不調和、すなわち再社会化の不成功ということになる。

しかしながら、冒頭で触れたマラソン選手とは異なり、彼らはやがて問題的状況を解決し、バーンアウトを克服するに至った。こうした過程は、ミード自我論によれば、彼ら自身にとって問題を孕んだ客我（Me）に対する主我（I）の反応過程と考えられる。客我とは「他者の態度（と生物体自身が想定しているもの）の組織化されたセット」であり、主我とは「他者の態度にたいする生物体の反応」[Mead, 1934]である。船津は、ミード自我論を解釈する際に、こうした反応を「遅延した反応」[船津, 1983 : 218]と捉えるが、宝月[宝月, 1982 : 240-242]も指摘するように、個人の反応様式は一律ではない。大別すれば、「即時的反応」、「試行錯誤」、そして「内省的反応」とがあって、これらの中でバーンアウト競技者の場合は内省的反応、換言すれば遅延した反応

を示したと言えよう。彼らは、こうした内省的反応過程を通して、それぞれなりに積極的な主体性を発揮し、バーンアウトを克服するに至ったのである。

ただし、前述のように、彼ら全てが同様の反応過程を辿ったわけではない。特に、内省的反応過程で、彼らにとって情緒的な支え（助力）を得る意味で重要となる交渉過程の様相には違いがあった。まず事例A・Eは、所属集団の指導者の配慮によって、また事例Bは、部活動の中で偶然的に交渉過程を得た。それに事例Dは、自ら恩師との交渉過程を得たが、事例Cの場合は特に交渉過程を得たわけではなかった。この点については次のように考えられる。

事例A・Eの場合は、競技レベルが停滞していたとはいえ、そもそも同部においてはそれが比較的高い位置にあった。とすれば、そうした競技者が落伍したならば、競技力向上（勝利）志向の指導者にとっては手痛いことになる。それゆえ、前述のような彼らのRD（スポーツ役割距離）が、大いに指導者側に対するアピールとして機能した。それにより、それまでは彼らの自主的な対処に任せていた指導者側が、何とか彼らを生かそうとして、REを変えるなりして情緒的な支えを彼らに施したと言えよう。そして彼らは、それを得たことを契機として、積極的な主体性を発揮し、専らヒーローとして注目されたいという自らのRCを変容させつつ役割実現過程へと進んだのである。そこで再現された行為は、図1において合意成立後のスポーツ役割形成に当てはまるであろう。

ところで、事例A・Eのこうした過程には、ソーシャライザーとソーシャライザー（社会化の担い手）の相互的影響[Snyder and Purdy, 1982]といった、スポーツ的社会化論の新たな側面が包摂されている点は注目されたい。

また、事例Dの場合は、過去の実績は輝かしいが、大学ではあまり活躍できなかったため、彼なりに自ら地元の恩師との交渉過程を得た。彼は、それを情緒的な支えとして積極的な主体性を発揮し、RCを変容させつつ、それまでの

REに新たな意味付与をした上で役割実現過程へと進んだのである。

そして、事例B・Cは、他の3名よりも競技レベルが低いこともあり、あくまで彼らなりに内省的反応を活発化していった。つまり、事例A・E以外の前述のようなRDは、指導者側のREの変容を促すことにはならないため、彼らが所属集団に存続するには、彼ら自身のRCを変えざるを得なかったわけである。

このことは、正しく競技集団におけるヒエラルキーを物語っていると言えようが、事例Dと同様、彼らもREをそのまま内面化したわけではない。事例Bは新たなコーチの指導を、また事例Cは自らの内省を通して思い返した高校の頃の思いを情緒的な支えとして、各々RCを変容させつつ、REにそれぞれなりの意味を付与していった。そして彼らが再現した行為も、やはりスポーツ役割形成に当てはまるであろう。

ここで、特に事例C・Dに着目すると、彼らは自力で過去の経験や過去に関わった人物ないしは将来の職業にまで視野を広げることにより、情緒的な支えを得て問題的状况を解決し、バーンアウトを克服することができたのである。5名の場合、過去の経験様式（今回のような問題的状况の未経験、指導者に対する依存的態度の形成）のため、問題的状况を自力で解決することが困難であり、それゆえにバーンアウトに陥った。その意味で、彼らが問題解決をするには、何らかの情緒的な支えが必要と言えようが、それが身近な所で得られないとしたらいかにすればよいのか。彼らの場合、内省活動を活発化することにより、自らそれを得るに至ったわけである。

このことは、スポーツ場面に限らず、一般的な主体性を議論する上でも非常に示唆的である。すなわち、個人が問題的状况に直面し、身近な所（所属集団等）で情緒的な支えを得ることができない場合、そうした状況を解決し得るような積極的な主体性を発揮するには、内省活動を活発化し、自我の社会性を空間的・時間的により拡大することが有効な手がかりになると言え

よう〔船津，1989〕。

以上、彼らの変容過程を主に図1に基づいて考察してきた。これまでみてきたように、彼らは内省的反応過程を通してバーンアウトを克服し、行為の変容を示したのである。とすれば、彼らのバーンアウトの克服過程は、同時に主体性の再形成過程とみることができる。また、彼らは新たな現実に適うように、自らのアイデンティティを再形成した。バーガーとルックマンによれば、これはスポーツによる（を通した）再社会化の成功ということになる。更に、事例A・C・Dの場合は、一歩進んで職業的社会化、とりわけその予期的社会化の段階に入ったと言えよう。

宝月〔宝月，1982：207-211〕によれば、彼らのこうした問題解決過程は、1つのキャリアの形成過程である。こうした過程を通して、個人は自己のアイデンティティを明確化（形成）していく。彼らは、それぞれなりの問題解決過程を通して、前述のように自惚れとも言える偏狭なるアイデンティティを再形成したのである。その意味で、彼らには、以前と比較すればかなりの成長の跡を見出すことができよう。すなわち、問題的状况というものは確かに1つの危機ではあるが、彼らのようにその解決の仕方さえ適切であれば、主体性ないしはアイデンティティを形成する上で意義が認められるのである。

ところで片瀬〔片瀬，1983：260-261〕は、構造的に分化し、多元化した現代社会における人間の成熟の条件を、エリクソンの言う「より広いアイデンティティ」、すなわちより普遍的な価値に立脚したアイデンティティの形成に求める。このことは、無論競技者として例外ではない。それゆえ、そうしたアイデンティティの形成を成し遂げることが、彼らの今後の課題となろう。しかしながら、スポーツによってそれはいかにして可能なのか。これに関して探求していくことは、われわれにおける重要な今後の課題と言えよう。

5. まとめ

本研究は、バーンアウト競技者の変容過程を、スポーツ的社会化論の新たな視点から検討してきた。しかし、研究の性質上、限られた少数の事例の検討に留まった。また、調査のデータ解釈における客観性を高めるために、その技法を今後益々習熟していかなければならない。こうした課題を踏まえた上で、これまでに得られた知見から指摘されることを以下に述べてみたい。

まず、本研究で対象とした軽度のバーンアウト競技者に限って言えば、それぞれなりの情緒的な支えさえ得ることができれば、問題的状况を解決するのがそれほど困難というわけではなかった。とすれば、軽度のバーンアウトの回復及びそれ自体を予防するためには、問題解決に結びつく情緒的な支えが競技者にとって重要であるが、バーンアウトに陥るような競技者は、指導者に対する依存心が特に強いと考えられるため、情緒的な支えとして指導者の果たす役割は大きいと思われる。しかし、指導者から配慮を施す場合、現実的にはそのタイミングの難しさや競技集団におけるヒエラルキー等の問題が存在する。それゆえ競技者には、問題的状况を自力で解決し得るような主体性の発揮（形成）が求められるが、こうした主体性を発揮するには、内省活動を活発化し、自我の社会性を空間的・時間的により拡大することが有効な手がかかるのである。そして、この様相によっては、望ましいか否かは別として、無論競技システムからの離脱もあり得る。ただし、このことは、ある程度の経験と自律性を有する者にのみ該当するであろう。では、それが望み難い子どもの場合はいかにすればよいのか。これに関する考察は今後の課題としたい。

ところで、彼らのバーンアウトの克服過程においては、ソーシャライザーとソーシャライザーの相互的影響という、スポーツ的社会化論の新たな側面が捉えられた。更に、バーンアウト競技者は、内省的反応過程を通して、バーンアウトを克服すると同時に主体性ないしはアイデンティティを再形成した。その意味で、こう

した過程は、スポーツによる（を通した）再社会化の過程と捉えることができるが、このことはスポーツ的社会化論における今後の方向性を考える上で示唆的と言えよう。

すなわち、そもそもスポーツによる社会化研究は、人格形成に及ぼすスポーツの規定力を特定することが困難なため、従来あまり行われてこなかった。しかし、こうした課題は、今後事例の分析を通して、方法論の精緻化を図るとともに克服していくことが必要と思われる。それに、従来のスポーツへの社会化研究は、人生における少年期の経験の大きさを重視するあまり、ややもすれば子どもに着目してきたが、これはスポーツによる社会化研究にも該当する。しかし、本研究の対象者は、少年期に経験し得ない状況に大学期で直面し、再社会化を遂げたのである。これは、あくまで一例だが、スポーツ界ではこれ以外にも青年期以降に特有の現象は多いであろう。こうした側面を捉えるためには、スポーツによる社会化研究の対象を、青年期や成人期へと拡大することが不可欠である〔青井、1976〕。それにより、スポーツにおける再社会化の様々な様相を分析していくことが今後求められる。

最後に、このようにみえてくると、恰もバーンアウトが人格形成上肯定されてしまう危険性がある。しかし、結果論からそのようにみるのは短絡的である。本研究の対象者の場合は、適切な問題解決ができたからこそ、バーンアウトを克服すると同時に再社会化を遂げたが、それは競技力向上や競技者のメンタル・ヘルスを考える上で、やはり望ましいものではない。肝心なのは、バーンアウトに陥らずに問題的状况を解決することなのである。

注

（1）こうした先行研究の具体的状況については、稲岡〔稲岡、1988〕、岸・中込〔岸・中込、1989〕によって報告されているので、それらを参照されたい。

(2) PerlmanとHartman [Perlman and Hartman, 1982] も、先行研究を検討した結果、同様に報告している。

(3) 競技者のバーンアウトの生起プロセスとしては、中込・岸 [中込・岸, 1991: 314-315] が、前述したEdelwichとBrodskyの見解によって提示した〈競技への熱中→競技成績の停滞・低下→競技への固執→消耗〉が有効と思われる。また、症状は、基本的には対人専門職のそれと一致するが、とりわけ情緒的消耗に関しては、対人専門職が人に対する消耗であるのに対して、競技者の場合は競技に対する消耗である点異なる [岸ほか, 1988]。なお、岸・中込 [岸・中込, 1989] は、特に心理臨床的立場から、競技者のバーンアウトの概念規定を試みているので参照されたい。

(4) この質問紙は、後に競技者のバーンアウト度を測定する質問紙 (Athlete's Burnout Inventory) として改良されている [岸ほか, 1988]。

(5) 本稿では主体性を、主観性 (subjectivity) と独立性 (independence) という一般的な意味として用いる [増田編, 1974]。ただし、後者は自律性 (autonomy) と同義的に捉えられる。なお、主体性の一般的な意味としては identity も挙げられるが、本稿ではそれを特に自我同一性という意味として区別して用いている。

(6) これは、山本 [山本, 1987]、吉田 [吉田, 1992] によって示唆されるが、一般的な社会化論 [柴野, 1977; 1978] の課題とも同義的と言えよう。

文 献

- 青井和夫, 1976, 「社会化再考」, 日本教育社会学会編『教育社会学研究』31, 東洋館出版社, 5-16.
- Berger, P.L., 1963, *Invitation to Sociology*, Doubleday and Company Inc. (水野節夫・村山研一訳, 1979, 『社会学への招待』, 思索社, 148)
- Berger, P.L. and Luckmann, T., 1966, *The Social Construction of Reality*, Doubleday and Company Inc. (山口節郎訳, 1977, 『日常世界の構成』, 新曜社)
- 近澤範子, 1988, 「看護婦の Burnoutに関する要因分析—ストレス認知, コーピングおよび Burnout の関係—」, 『看護研究』21-2, 157-172.
- Edelwich, J. and Brodsky, A., 1980, *Burn-out: Stages of Disillusionment in the Helping Professions*, Human Sciences Press, 27-30.
- Farber, B.A., 1983, "A Critical Perspective on Burnout", in Farber, B.A. (ed.) *Stress and Burnout in Human Service Professions*, Pergamon, 1-20.
- Fischer, H.J., 1983, "A Psychoanalytic View of Burnout", in Farber, B.A. (ed.) *Stress and Burnout in Human Service Professions*, Pergamon, 40-45.
- Freudenberger, H.J., 1974, "Staff Burn-out", *Journal of Social Issues*, 30-1, 159-165.
- 船津衛, 1983, 『自我の社会理論』, 恒星社厚生閣.
- 船津衛, 1989, 『ミード自我論の研究』, 恒星社厚生閣, 138-140.
- 波多野義郎・中村精男, 1981, 「『運動ざらい』の生成機序に関する事例研究」, 『体育学研究』26-3, 177-187.
- 宝月誠, 1982, 「相互作用論からみたキャリア分析—「ジャック・ローラー」の解釈の試み—」, 『哲学研究』544, 202-251.
- 稲岡文昭, 1988, 「米国における Burnoutに関する概要, 研究の動向, 今後の課題」, 『看護研究』21-2, 140-146.
- 金子勇, 1993, 「社会調査の方法」, 金子勇・長谷川公一『マクロ社会学』, 新曜社, 307-331.
- 片瀬一男, 1983, 「E・H・エリクソンにおける二次的社会化の視点—ライフ・サイクル論の意義をめぐって—」, 日本社会学会編『社会学評論』34-3, 254-269.
- Kenyon, G.S. and McPherson, B.D., 1973, "Becoming Involved in Physical Activity and Sport: A Process of Socialization", in Rarick, G.L. (ed.) *Physical Activity: Human Growth and*

- Development*, Academic Press, 304-333.
- (山本教人・中塚義実訳, 1988, 「身体活動やスポーツにかかわり合うようになることー社会化の過程ー」, 糸野豊編訳『スポーツと文化・社会』, ベースボール・マガジン社, 331-361)
- 岸順治・中込四郎・高見和至・土屋裕睦・吉田毅, 1988, 「運動選手のバーンアウト状態の特徴について」, 『日本体育学会第39回大会号』, 156.
- 岸順治・中込四郎, 1989, 「運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み」, 『体育学研究』34-3, 235-243.
- 岸順治・武田徹・吉井泉・中込四郎・鈴木壮, 1991, 「運動選手のバーンアウト状態の変容ー競技活動の満足度と性格特性の影響ー」, 『スポーツ心理学研究』18-1, 75-77.
- Maslach, C. and Jackson, S.E., 1981, "The measurement of experienced burnout", *Journal of Occupational Behaviour*, 2, 99-113.
- 増田綱編, 1974, 『新和英大辞典』, 研究社, 1628.
- 舛本直文, 1988, 「スポーツの解釈学の可能性と限界」, 『体育学研究』33-2, 101-110.
- 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・磯貝浩久・舟越美津, 1990, 「スポーツ競技者のバーンアウトに関する実証的研究ースポーツ少年団員をめぐるー」, 『日本体育学会第41回大会号』, 127.
- Mead, G.H., 1934, "Mind, Self and Society", in Morris, C.W. (ed.) *Mind, Self and Society*, The University of Chicago Press. (稲葉三千男ほか訳, 1973, 『精神・自我・社会』, 青木書店, 187)
- 中込四郎・岸順治, 1991, 「運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究」, 『体育学研究』35-4, 313-323.
- 直井優, 1988, 「非指示的面接」, 見田宗介ほか編『社会学事典』, 弘文堂, 738.
- Ogilvie, B.C. and Howe, M., 1986, "The Trauma of Termination from Athletics", in Williams, J.M. (ed.) *Applied Sport Psychology*, Mayfield Publishing, 365-382.
- 小此木啓吾, 1985a, 「神経症」, 小此木啓吾ほか編『産業精神医学』, 医歯薬出版株式会社, 88-104.
- 小此木啓吾, 1985b, 「職場不適応」, 小此木啓吾ほか編『産業精神医学』, 医歯薬出版株式会社, 183-189.
- Perlman, B. and Hartman, E.A., 1982, "Occupational tedium in the social services", *Social Work*, 23-6, 499-507.
- 柴野昌山, 1977, 「社会化論の再検討ー主体性形成過程の考察ー」, 日本社会学会編『社会学評論』27-3, 19-34.
- 柴野昌山, 1978, 「人間形成の構造ー主体的社会化論の展開ー」, 麻生誠・柴野昌山編『変革期の人間形成』, アカデミア出版会, 7-34.
- Smith, R.E., 1986, "Toward a Cognitive-Affective Model of Athletic Burnout", *Journal of Sport Psychology*, 8, 36-50.
- Snyder, E. and Purdy, D.A., 1982, "Socialization into sport: Parent and child reverse and reciprocal effects", *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 53, 263-266.
- 土屋裕睦, 1989, 「大学運動選手におけるバーナウトの程度を規定する要因の分析」, 『昭和63年度筑波大学体育研究科修士論文抄録』11, 125-128.
- 山口泰雄・池田勝, 1987, 「スポーツの社会化」, 日本体育学会編『体育の科学』37-2, 杏林書院, 142-148.
- 山本清洋, 1987, 「子どもスポーツに関する社会化研究の現状と課題」, 体育・スポーツ社会学会研究会編『体育・スポーツ社会学研究』6, 道和書院, 27-49.
- 吉田毅, 1989, 「大学競技者におけるバーンアウトの発生機序に関する事例研究ー特に指導者との相互作用に着目してー」, 体育・スポーツ社会学会研究会編『体育・スポーツ社会学研究』8, 道和書院, 183-207.
- 吉田毅, 1992, 「スポーツ社会学における社会化論への一視角ー主体性をめぐってー」, 『体育学研究』37-3, 255-267.
- 吉田毅・松尾哲矢, 1992, 「スポーツ選手のバーンアウトに関する社会学的研究ー社会学的概念規定への試みー」, 日本体育学会編『体育の科学』42-8, 杏林書院, 640-643.